

Shakespeare の Sonnets の 諸問題

中 島 源 治

G. Wilson Knight は 'Shakespeare's Sonnets and *The Phoenix and the Turtle*' に関する著書 'The Mutual Flame' (1955) の序文において、先づ彼の従来の態度として、詩そのものを中心課題としながらもその含む伝記的なものや事件のごとき第二義的な考察をも、全く無視することをしないやうに努力したことを表明し、更にこの第二義的な問題について次のやうに述べてゐる。

These I could, of course, have ignored, but in a matter where so many theorists have engaged themselves to the point of disaster, it would have been rather unkind to refuse the same risks myself. Besides, so much personal theory has clustered round Shakespeare's Sonnets that to treat them in isolation might be to leave the reader in a state of anxiety.

(勿論これらの事柄は無視しようと思へば出来ることではあつたが、これまでまことに多くの人々がそれぞれの学説を立て、ついにいさゝかづいさゝかなくなつてゐる程の問題に、私だけがその危険に陥ることを逃れようとすることはむしろ厚意のないことであつたらう。尙又、シェイクスピアの「ソネット」をめぐつてかくも多くのそれぞれの学説がむらがつてゐるからには、それらを相手にしないといふことは読者をして不安がらせることになるかも知れない。)

そして同書第一章において、「ソネット」を伝記的なものだとする憶測から出発した、例へば Samuel Butler; Oscar Wilde 等をはじめ、諸家の意見を紹介批評してゐるが、その章の最後において結論的な態度として次のやうに開陳してゐる。

But can we accept any of these assurances as true? We have only Shakespeare's word for it, and the Fair Youth might tell a very different story; and so might the Dark Lady. All we can say is, that, within the context of the Sonnets, Shakespeare's love is of this sort; what the Sonnets insist on repeatedly must be for us, in so far as we are attempting so elucidate their meaning and value, the truth. After all, the whole sequ-

ence may be a work of art devised as deliberately as Nietzsche's *Thus Spake Zarathustra*; if, indeed, that was deliberately devised. We can put it like this: if the poet is not sincere, the poetry is. And what more, at this hour, concerns us? Whether or not he has exactly recorded a section of his autobiography we can never precisely know; but he has certainly left us a poetic record of considerable interest (p.21).

(ところでわれわれはこれらの保証をどの程度眞実として受容れ得るだらうか。われわれは保証としては只シェイクスピア自身の言葉を持つてゐるだけである。あの美青年だつて全然違つた話を語るかも知れないし、あの黒婦人にせよ然りであらう。そこでわれわれの言ひうる凡てはかうである——「ソネット」の文脈内ではシェイクスピアの愛情といふものはこの種のものである。そして「ソネット」自体が繰返し主張してゐることこそ、われわれがその意義と価値を説明しようとする限りにおいて、われわれにとつて眞実でなければならぬ。つまり一連の全ソネットは、ニーチェの「ツアラツーストラかく語りき」と同様に慎重熟慮の下に案出された藝術作品と云へるであらう、もしそれが眞に慎重熟慮の下に案出されたものとすれば。われわれはこのやうにまとめることが出来る、即ち、詩人は眞摯でないにしても詩自体は眞摯なものである。この際、われわれにとつてこれ以上何の関係することがあらう。詩人が自己の傳記に関する部分を正確に記録したかどうかについて、われわれ

は的確に知るを得ない。けれども彼は確かにわれわれに相当興味ある詩的記録を残してくれた。) 要するに Knight の「ソネット」解釈の態度は、妥協的と言

へば妥協的であるが穩健中庸で、所謂詩中心の解釈的態度といふべきものであらう。

他方、「ソネット」の主題——「Youth」と「Beauty」を破壊する暴君としての「Time」と「Death」、これ等と対決する詩の力による「青春」と「美」の不滅化——に関する当時の慣習的な思想を分析して、その根源を Ovid に求め、又劇との関連において詩人のアイデアの發展過程を根気よく追求して、現行のソネット順位に新しい sequence を求めて努力してゐる十分野心的な、そしてアカデミックな解釈者 T. W. Baldwin の, *On the Literary Genetics of Shakspeare's Poems & Sonnets* (1950) がある。

(註——彼の著書を通じて「Shakspeare」といふ綴りを用ひてゐる)

著者 Baldwin は先づその序文において、Ovid の影響の主体がシェイクスピアのソネットや詩に発見され、それから劇作品に浸透していつたこと、それら詩やソネットにおいてシェイクスピアが当時流行のオヴィッド様式を用ひたこと、そしてその十六世紀の語法については、これらの作品の分析並びに綜合或はその源泉を検討したこと等をまづ表明し、この観点からあらゆる証拠資料の発見と提供に努めたこと、そのためには先人の諸学者、例へば Malone を始め、Edward Dowden や Tucker Brooke、それにオヴィッドと関係づけた Sidney Lazarus Lee 等の功績

を認めねばならぬこと、そして彼自身としてはこれら先人学者の提供した事実若干のものを追加しただけであり、ある面では Dowden の仕事を續けたに過ぎない、と卑下してゐる。(尤もこの卑下は、本論において示されてゐるやうに、単なる卑下ではない。)ところで彼は当然従来の自伝説の諸問題に触れるのであるが、Pembroke 対 Southampton の問題のうきまことに忌避し、不幸な問題であるとして、次のやうに言ふ。

These myriad concatenations, worked out by scholars of various leanings, must either be broken or we can arrive at only one conclusion as to patron. But the facts themselves do not indicate to me that the particular conclusion is important. Personally, I see small choice in proposed patrons. Shakspeare is here as always the only really important thing (Preface, Viii).

(種々傾向の異なる学者によつて作り上げられたこれら幾多の問題の連鎖関係は保護者の点についてはばらばらに解消されねばならないか、或は只一つの結論に到達しうるだけである。しかし事実そのものは自分に、特殊な結論が重要であるといふことを示してはくれない。個人的に言へば私は、提案された両保護者の選り好みなど殆どない。シェイクスピアがここでは常のごとくに只一人の眞に重要な人物なのである。)

そして更につゞけて、ある種の資料が——例の保護者の問題に關するものごとき——伝記的事項の価値を帯びてゐても、この著書がシェイクスピアの伝記ではないことは言ふまでもないこと、

これらのソネットを尙ほ自伝的なものとしての興味を持つ讀者があるとすれば、彼はまづかかる先人觀を止揚して注意深くソネットを読む必要があること、かくして讀者はこれらソネットが少くともシェイクスピア自身の詩的手腕についての自伝的なものであることに想到するであらう、と提言する。そしてシェイクスピアの詩的技巧についての彼の考へ方を次のやうに述べてゐる。

His methods of developing figures and ideas, by association as it were, are particularly fascinating, and I believe revealing. These figures are semi-objective and reveal certain processes in Shakspeare's mind, whereas images, so-called, as applied to Shakspeare are wholly subjective and reveal principally certain processes in our own. Meticulous study of such mechanical details is not particularly inspiring indeed. But we must not undervalue the means to the end. We bless the bread of physical existence because it makes spiritual existence possible (Preface, Viii).

(彼が、謂はば連想によつて表象と思想を發展させる方法は特に魅力的なものであるが、私は啓示的であるときへ信ずる。これらの表象は半ば客観的なものであつて、シェイクスピアの心内におけるある種の過程を示すものである、これに対してシェイクスピアに適用されてゐる如き所謂心象なるものは全然主観的なものであつて、われわれ自身の心内におけるある種の過程を主として示すものである。かかる機械的な細部にこだわるや

うな研究は、実のところ特別に感銘をうけるやうなものとはならない。然しながらわれわれはこの方法を最後まで輕視すべきではない。われわれは肉体的存在としてのパンが有難いのである。何故ならそれが精神的存在を可能ならしめるからである。

Baldwin のかかる見解からして、彼の研究態度が主観的と客観的との間に不即不離の立場にあることが察せられるが、所謂傍証固めとしての証拠資料の発見に非常に努力を払つてゐることにわれわれは敬意を表したい。彼の主として縦の關係からシェイクスピアの思想の経路をたどりつつ、ソネットの順序にそれぞれの sequence を設定しようとする態度と、Wilson Knight の横の關係をたどつた詩的解釈のそれとは、戦後におけるシェイクスピアのソネット研究における代表的な對照をなしてゐるものと思ふ。次に両者の著書から、筆者が特に興味ありと思ふ点を一・二紹介する。

シェイクスピアのソネット集の中で従来最も議論の多いのは第一〇七番であるが、この一首の意味を單に詩人とその愛友との關係においてのみ解釈してゐる Edward Dowden の説に基本的に同意してゐる Baldwin は、この一首の意味をば第六十五首に表明された疑問への單なる解答である、と主張する。これに対して Knight が 'the statement appears too extreme, contradicting the poetic impact.' (p. 5) (この意見は詩的含みを無視した極端すぎるやうに思へる。)と反駁してゐる。

問題のソネットを引用して、いまだし詳細に両者の意見の相違を考へてみることにする。

Since brass, nor stone, nor earth, nor boundless sea,
But sad mortality o'er-sways their power,
How with this rage shall beauty hold a plea
Whose action is no stronger than a flower?
O, how shall summer's honey breath hold out
Against the wreckful siege of battering days,
When rocks impregnable are not so stout,
Nor gates of steel so strong, but Time decays?
O fearful meditation! where, alack,
Shall Time's best jewel from Time's chest lie hid?
Or what strong hand can hold his swift foot back?
Or who his spoil of beauty can forbid?

O, none, unless this miracle have might,
That in black ink my love may still shine bright.

(No. LXV)

Not mine own fears, nor the prophetic soul
Of the wide world dreaming on things to come,
Can yet the lease of my true love control,
Supposed as forfeit to a confined doom.
The mortal moon hath her eclipse endured,
And the sad augurs mock their own presage;
Incertainities now crown themselves assured,
And peace proclaims olives of endless age.
Now with the drops of this most balmy time

My love looks fresh, and Death to me subscribes,
Since, spite of him, I'll live in this poor rhyme,
While he insults o'er dull and speechless tribes:

And thou in this shaft find thy monument,

When tyrants' crests and tombs of brass are spent.

(No. CVII)

Baldwin は先づ、第六五番の最初の四行句の疑問に対して第一〇七番の最初の四行句はその基本的返答を示してゐるものであり、それが第二の四行句において高揚されて結尾の六行 (sestet) において結論づけられてゐる、と前提し、そのマイデマを次のやうに解釈してゐる。

It will be seen that the answer in Sonnet CVII is in the same legal phraseology, and that the fourth line merely refers to the Ovidian-Horatian theme of *Tempus edax rerum*, according to which all physical things are "Suppos'd as forfeit to a confined doom." So the first quatrain of Sonnet LXV poses the Ovidian question in legal figure, and the first quatrain of Sonnet CVII answers that same question in legal figure. Failure to grasp the Ovidian reference has resulted in many needless conjectures as to possible specific allusions in this first quatrain. There are none here certainly (p.310).

(第一〇七番の解答が全く同一の規定にかなひた語法であること、また第四行目は單にオヴィッド・ホレース流の「時とつゝ

万物を滅却する者」(Time, the devourer of things) とする主題に関連せるにすぎず、これによつて凡ゆる肉体的存在物は「限られたる運命のいけえと想定」されるといふことが判明するであらう。そのやうに第六五番の最初の四行句も規定に合つた表象をもつてオヴィッド的疑問を呈しており、第一〇七番の最初の四行句もその規定に合つた表象をもつ同じ疑問に解答してゐる。オヴィッドとの関連を把握し得ないといふことが、この最初の四行句(筆者註—第一〇七番の)における何等かの特殊な言及について不必要に多くの憶測を生む結果となつたのである。確かにここには外の何物も含まれてゐないのである。)

更に第一〇七番第二の四行句中にある 'mortal moon' の意味について、Baldwin は第六五番第三行目の 'sad mortality' という語と第二の四行句の疑問に照らして説明出来る、とつて次のやうに断言する。

—it must appear that the answer concerning the "mortal moon" merely means that the sad augurs had presaged "sad mortality" in some form when the moon went into eclipse (they always did!), but now found that it was not so (they always do!). The moon illustration itself does not belong conventionally to the Ovidian-Horatian background, and had not been used in Sonnet LXV, but it has been fitted into the conventional Ovidian application (p.310).

('mortal moon' (筆者註—問題のこの句の訳は特にはなへ)

に關しての解答は單に、陰氣な占師達が月の蝕の時に何等かの形で「悲愁なる死」のことを予言してゐた―彼等は常にさうしたのだ―しかし今や月の蝕がないことを見出したのである―彼等は常にさうするものだ！この月の引例それ自体は、オヴィッド・ホレース流の背景に慣習的なつきものではないし、第六五番には用ひられてゐないのであるが、しかしそれはオヴィッド的なものとして慣習的に適用されて可なるものであつた。）

第二の四行句においても結局第一〇七番の答は第六五番の問に対応するものであつて、その確固永遠の平和の到来となつた理由は結尾の六行中に述べられてゐる。即ち、「死」も永久に詩人によつて征服されて、詩人とその愛友はここに適はしいオヴィッド的不滅性が保証され「いとも香豊かな季節の露に、わが愛もなやかに魅へる」ことになる。このやうに推論して Baldwin は結論として

So Sonnet CVII merely answers the questions posed in Sonnet LXV, usually in its own figures, with no possible allusions to contemporary actualities, unless there be an allusion to an eclipse of the moon (p.311).

(かくてソネット第一〇七番は普通のやうにそれ自体の表象でもつてソネット第六五番の含む疑問に單に答へるだけであつて、月蝕といふことにある含みがなければ外に當時の時代的動きに含みを持たせてゐるなどとは考へられない。)と言つてゐる。

この 'Ovidian-Horatian theme' を盾とした Baldwin の所論

に對して G. Wilson Knight はその潜在意義―詩的含みを無視した極端論だ、(前記著書、五頁)と極付ける。Knight に依れば、第一〇七番は第一〇六番のアイデアの繼續であり、特に「愛」の主題と、遙かに印象的で且つ国家的復興 (national recovery) の主題を詩的に彩つたものとの意義深い融合を示すものだ、として特に、

'the prophetic soul Of the wide world dreaming on things to come.' (107 : 1—2)

(將來する物について思ひめぐらすこの広き世界の予言者)

を引用して次のやうに反駁する。

This I take to refer either directly or through some sort of analogy to world-affairs. In his *Literary Genet-ics* (XI, 309—11) T. W. Baldwin regards it as no more than an answer to earlier sonnets (e. g. 65, 104, etc.) But surely the sonnet describes a relationship of two orders of thought, personal and communal, which are tied together in 'Now with the drops of this most balmy time': some sort of a distinction is clearly implied by 'with', 'time' holding, in Shakespeare's usual manner, a reference at once communal and contemporary. It may be worth noting that the poet is here primarily interested in *his own* literary immortality, saying, with a touch of pride, and even egotism, 'Death to me subscribes', and

contrasting his own good fortune with all who are 'dull and speechless'. The young man is given a share in this immortality as an afterthought: 'and thou in this shalt find thy monument' (107) (p.114).

(私はこの意味を直接にか或はある種の類推を通して世事の問題に言及したものと考へた)。T. W. Baldwin はその著 *'Literary Genetics'* (XI, 309—11) において、これをそれ以前のソネット(例へば六五・一〇四など)に対する解答にすぎないものだ、と考へてゐる。然し確かにこのソネットは思想の二つの流れ、個人的なものと社会的なものの關係を述べてゐる。そしてこれらが「今やいとも香豊かな季節の露に」の句で結ばれてゐるのである。そしてある種の區別は、シェイクスピアのいつもの様式で、社会的であると同時に当代的な關係を支へてゐる 'time' と 'with' の二語によつて判然と暗示されてゐる。

詩人がここで誇りと自負心さへもつて「死はわたしに服従する」と言ひ、また彼自らの幸福と「鈍くて言葉も言はぬ」人々とを対照して、彼自らの詩的不滅性に強く感興を覚えてゐることについては注意する値があるであらう。かくて青年は「君はこの(詩)の中に君の思出の碑を見出す」といふ後思においてこの不滅性を分有することになるのである。)

このやうに推論する Knight は、先に引用した 'mortal moon' の内容を暗にエリザベス女王に結びつけて考へてゐるやうであり、この 'mortal' の意味を 'seems to mean earthly or human ... or it might mean subject to death' (Knox Pooler) と

解してゐることが察せられる。所謂「人界の太陰」(坪内訳)である。他方 Baldwin は、既に引用したやうに「月の蝕といふことにある含みがなければ」と、この 'The mortal moon' の意味については疑問を残したままである。かくしてソネット第一〇七番は伝記的諸事件と結びつけられる限り、そして決定打的資料の発見されない限り、永遠に注釈家の間の謂はば最大の解かれざるクイズとしてあるであらう。

Baldwin が彼の立論の場としてオヴィッド・ホレースの主題を熱心に取上げてゐるのに対して Knight が殆ど全くこれに言及してゐないことは、彼のソネット解釈の方法論の立場から察して当然かも知れないが、Baldwin との張合ひ上いささか物足りなしい感がある。(尤も、'Phoenix and Turtle' の章ではオヴィッドの主題に触れて Baldwin の説を十分に尊重してゐるやうに思はれる。)

Baldwin がいま「ソネット解釈に力を注いでゐると考へられることは、愛友の若さと美が詩人の詩に依つて「時」と「死」の暴力を超絶して不滅の生命を克ち得るといふ不変性(constancy)を説くに當つて、Plotinus の新プラトン学説を適用してゐることであらう。次にこれを要約して紹介する。(前記著書、第六章一五七頁以下参照)

彼は先づ「ヘンリー四世第二部」の第五幕五場からの引用から彼の論を進めてゐる。即ちフォルスタフがシャローやピストル等と新王の到着を待つてゐる時の次の会話である。

Fal. But to stand stained with travel, and sweating

with desire to see him ; thinking of nothing else ; putting all affairs else in oblivion, as if there were nothing else to be done but to see him.

Pist. 'Tis *semper idem*, for *obsque hoc nihil est* : 'tis all in every part.

フォル、汚れたままの旅行服で、只もう逢ひたさに、汗を流して、何もかも忘れて、放擲ツとして、やつて來たらしく見えるからね。

ピスト すなわち、要するに一にして二ならずです。所謂不即不離でさ、全が各部に存在してゐるんです。(坪内訳)

この文句中の 'all in every part' は靈魂の不変性と不滅性を説いた一五九三年出版の 'The Phoenix Nest' (著者不明) に見える 'Tota in toto, et tota in qualibet parte' というラテン文句の英訳 'Tis all in all, and all in every part.' と関係あることが指摘される。'all in all' という簡単な表現は、シェイクスピアが完全という意味にしばしば用ひてゐることであるが、この句は聖書にも見出され、コリント前書に 'God may be all in all' (一五章・二八節) とある。ソネット集から、この文句及び類似の句を探せば次の如きもので、それぞれ重要な意味を以て行の中に位置してゐる。

Resembling sire and child and happy mother,

Who, all in one, one pleasing note do sing : (VIII, 11—2)

A man in hue, all 'hues' in his controlling,
Which steals men's eyes and women's souls amazeth.

(XX, 7—8)

Their images I loved I view in thee,
And thou, all they, hast all the all of me. (XXXI, 13—

4)

Sin of self-love possesseth all mine eye,
And all my soul, and all my every part. (LXII, 1—2)

For nothing this wide universe I call,

Save thou, my rose ; in it thou art my all. (CIX, 13—4)

You are my all the world, and I must strive
To know my shames and praises from your tongue.

(CXII, 5—6)

(筆者引用)

プロチヌスの説は一五九〇年に出版された St. Thomas Aquinas の 'Summa' (筆者注—The Highest ; The Whole の意) によつて流布され、その中の文句—'Anima est tota in toto, & tota in qualibet parte' (筆者注—The soul is all in all and all in every part. の意) が前記 'The Phoenix Nest' 中に引用されて慣用の英訳文句となつたのである。シェイクスピアがこの文

句を知つてゐても、『ヘンリー四世第二部』においてピストルに言はしめてゐる意味は、靈魂に關する當時の基本的信条に直接關連せしめてゐないのは明白で、Baldwin によれば 'Pistol is not illustrating all-pervasiveness and all-unity, but all-constancy, equating with *semper idem*; and all-inclusive, equating with *obscure hoc nihil est*' (ピストルは「常に同一」といふラテン語の意に相等させて一切融通並に一切合一の説明をしてゐるのではなくして、一切不変を説明してゐるのであり、「この事を忘るれば無あるのみ」といふラテン語に相等するものとして一切含有といふことを述べてゐるだけである。)'といふのである。

またこの 'semper idem, (=always the same)' は 'semper eadem, といふ女性形においてエリザベス女王の座右銘となつてゐたことが指摘されてゐる。且つこの句は神學上の意味をも含んでゐて、その説は少くもプラトニーにまで及ぶ必要がある。プラトニーの説はシセロを通じて伝へられ、シセロの説はその 'The Tusculan Questions' (translated by John Dolman) の出版 (一五六一年) によつてエリザベス朝期の人々に普及した。かくてシェイクスピアもこれを読んでゐたことは証拠立てられる。彼が用ひた 'semper idem' といふ語は矢張シセロの訳を経てプラトニーの 'Timaeus' に溯るものであるが、このプラトニーの思想が 'semper eadem' の句を、エリザベス女王がさうであつたやうに王室にとつて適はしい標語たらしめたやうである。

更に Baldwin はシセロの原文を引用し、またその他の傍証を

重ねて、結局、シェイクスピアがピストルをして言はしめたラテン文句は、そのままの形で原文にあるのではなくて、ヘンリー五世となるべき所謂ハル王子に對するフォルスタンの不変の忠誠心を語る文句の各々に、該當するラテン文句を与へたに過ぎないものである、と判断する。そして前記 'The Phoenix Nest' に引用されてゐる 'tota in toto' 云々のラテン文句の意味とからんで、ピストルの言葉となつたものと考へられる。Baldwin はこのやうに推論してソネットとの關係に及び、次のやうに言ふ。

The sonnets show that Shakspeare himself had gradually developed this connection of constancy with the doctrine of the soul, or at least that the connection had developed for Shakspeare as he wrote the sonnets (p.165)

(ソネットはシェイクスピア自身が恒久不変の精神と靈魂の信条とのこの關係を漸次發展させていつたことを、或は少くともこの關係が、彼がソネットを書いてゐる時にシェイクスピアのためにすでに發展してゐたことを示してゐる。)

この 'all in all' の思想が如何にソネットに展開されてゐるかを、彼は、一六〇九年の the quarto による順序に従つて検討をつづけてゐる。そして既にその主要部分を引用したそれぞれのソネット及び關連するその他のソネットの解釈において、彼の立論の裏づけをしてゐるのである。彼はまたこの 'all in all' の思想が、問題の Southampton 伯——The Wriothesley 家の座右銘 'Ung par tout, tout par ung' (=one in all, all in one の

意)に通ずるとして、ソネット第一〇五番の 'To one, of one, still such, and ever so' (l. 4) (一なるものに、一なることを、かくの如く常に變らず) にかかはる人物を Southampton である、と主張する Charlotte Stopes 等の説に言及して次のやうに推論してゐる。(一七五頁以下参照) Stopes が指摘するこのモットーの文句の意味を多少變へた 'one for all, (or) all for one' という句が、シェイクスピアが一五九四年に Southampton に献上した 'Lucrece' 中にあることを Baldwin は先づ紹介する。主要部分を引用すれば――

That one for all, or all for one we gage;

As life for honour in fell battle's rage; (ll:145-6)

凡てのために一を或は一のために凡てをわれわれは賭ける
殘虐な戦において名誉のために生命を賭けるやうに

彼は the Southampton motto のフランス語の原句にある 'par, pour' の意に改めたのは、この教訓に Southampton の注意をひき、かくしてそこに個人的な氣持を含ませるためであつたらうか、と軽い疑問を示しつつ、兎に角獻詩に當つてシェイクスピアが當時確かに青年であつた Southampton に対するこれが一片の忠言であつたと推定する。このやうなある含みを持つた言ひ回しが、また、この the Southampton motto に通ずる靈魂の恒久性を主題とするソネットに適用されてゐるやうにも思へるのである。このやうにソネットの主題を Southampton と関連せしめることによつて、シェイクスピアの着想自体が、当時友情精神の伝統をなしてゐた homosexuality の問題と絡むことにな

る。ソネット第二〇番は全ソネット中で pederastic な色彩を帯びたものとして批判的となつてきてゐるのであるが、かかる要素は確かに何も存在しないのである。疑問を持たれる理由はか的美青年の存在のためであることは事實であるが、われわれは先づ婦人の美を称讃することには慣れてゐながら男性のそれには慣れてゐないといふこの根本的な矛盾に思ひを致すべきである。また、従来女性に対する着想 (conceit) ――その幾分かは当然みだらな色彩を帯びることになるのであらう、が今やある程度男性に適用されてゐるに違ひないのであつて、かかる適用の結果が恐らく言はず語りにその地肌を現はすことになるであらうし、或は判然と男性に適用されてゐると言へないかも知れない。このやうな背景的事情を知るものはシェイクスピアの同性愛の問題などに疑念を抱く筈はないのである、と推定し、最後に次のやうな警告を表明してゐる。

It is thus useless to go seaching for Shakspeare's very small needle in this very large haystack; one can only wait till by chance one day some scholar sits upon it (may its point be sharp, his skin be tender, and his exclamations loud!) (p. 180).

(この極めて大きい乾草堆積の中におちてゐるシェイクスピアのごく小さな針を探してゆくなど無益なことなのだ、人は只ある学者がある日たまたまその上に坐り込むのを待つてゐればいいのである――針の先は尖つてゐるであらうし、彼の肌は柔かいし、彼の叫び声はさぞ高いことだらうよ!)

Baldwin はこのやうに述べて、シェイクスピアのソネットのアイデアが伝統に依らぬ特異な色彩であること、*'Lucrece'* に見られる Southampton motto に通ずる着想が、ソネット第三一番に発見されるが、これに類似の着想を含む特殊のソネットがまた Southampton に宛てられてゐることは明らかであるやうである、が然し、自分の現在の目的は *'Anima'* が主要な問題であつて、Southampton の問題は在りさうな副産物かも知れぬが余り重要なことではないのである、と結んでゐる。次に、この問題に關する Knight の主張を要点的に考察してみたい。(前記著書第二・第三章参照)

Knight によれば、詩人とその愛友との關係のごときはそこに何も特異な要素を持つものではない。大詩人であればある程、或はヒューマンな、又はヒューマニステイックな主題や行為に詩人が対すれば対する程、この種の誇張は起りうることで、古代ギリシヤやルネッサンス期には幾らも見られ得る、と言つて、Plato の *'Phaedrus'* や *'Symposium'* それに Virgil の *'Eclogues'* 等のギリシヤ、ラテンの詩の例、又、イギリス文学では Gray, Byron 或は Tennyson の *'In Memoriam'* 等の例をあげる。エリザベス朝期においては *'friend'* と *'lover'* の意味が相交錯してゐて、それが「ロマンチックな色調」とも稱すべきものであつたやうで、かかる友情にこもるロマンスが詩的理想化の形式で現はれたものと考へられる。シェイクスピアのソネットもかかる例の一つである。ここで注意したいのはソネット第二〇番及び第三六番における sexual impulse のことである。後者では

'I am sorry that normal sexual intercourse between us is impossible' といふ意味のことが述べてあるが、*'sexual intercourse'* が豊かな恋愛生活において必然的なものと考へられる限りは、*'the romance remains one, to quote Marvell's Definitions of Love, begotten by despair upon impossibility'* (p. 25)——そのロマンスは、マーヴェルの『愛の定義』によれば、
「かかることが不可能のための絶望から生れたままの状態をつづける。」と、彼は考へる。かかる愛は、だが悲劇的とは思へぬ。肉体的交渉が「眼」による以上のものでない所に愛の崇高さにより完全さが感ぜられる。勿論ソネットには *'Venus and Adonis'* におけると同じやうな肉体的情熱が示されてはゐるが、それは色欲的な問題よりも敬慕の問題なのである。次に Knight は Baldwin が消極的な、むしろ否定的な態度を示してゐるところの homosexuality の問題を取上げる。勿論彼はこの語に *'physical-intercourse'* を意味させるつもりはないと念を押しながらソネットには *'physical and sexual attraction'* が含まれてゐる。そしてそれは *'agapē'* よりも *'eros'* に一層近いものだ、と考へる。更に、シェイクスピアは *'a sort of feminine genius'* であつたとする Wyncham Lewis の説を是認し、シェイクスピアが *'A Lover's Complaint'* や *'Venus and Adonis'* において女性的観点から異性愛を書いたと類似の経験をソネットにおいても示したのである。一方、*'The Rape of Lucrece'* には、その肉欲的な面と罪とに苦悩する点において、ソネットにおける詩人と黒婦人との關係のより暗い要素が反映してゐる。ひと度この事

実を知らば劇には、例へば *'The Merchant of Venice'* と *'Twelfth Night'* に出る二人の Antonio の場合における如き——同性愛的感情の例が判然と見出されるけれども、この事が彼の正規の恋愛詩においても言へることがわれわれに理解出来るであらう。シェイクスピアは常に彼の描く女性達の「内部深く」に愛人として存在してゐるし、そして男性達は愛人として、客観的にまた批判的に表現されるのである。彼の女性達はシェイクスピア自身の自我乃至魂の女性的面を代表するものと言へるかも知れないのである。

James Joyce's Mr. Best was also probably thinking of Wilde when he remarked of Shakespeare : 'His boy-women are the women of a boy. Their life, thought, speech, are lent them by male's (*Ulysses*, ed. 1936 : 179).

(ジェイムス・ジョイスのベスト氏は、彼がシェイクスピアについて「彼の少年女形達はずまり少年による女性達である。彼女等の生活も思想も言葉も男性からの借物である。」と言及する時、恐らくワイルドのことを考へてゐたであらう。)

と例証する Knight はシェイクスピアの婦人達が実際、彼と若き愛友との問題に関係づけられることを確信し、wilde 説による少年女役の見方はソネット第二〇番の解答として相当の意味を持つものと考えるのである。然し彼が重ねて強調してゐる事がある。ルネッサンス期の抒情詩人達が homosexual engagement のために heterosexual terms をどの程度に使用してゐるかは確信出来ないけれども、かかる交渉において性的達成のこと

(sexual consummation) は否定されて、性が意識内に押込められ、かくして「眼」の問題が強く取上げられることになる、といふことである。そして、この「眼」による愛情の交換から出発して、詩人と友の関係一切が理想化に向つて発展してゆく過程を追求するのである。彼はソネット中の詩人をシェイクスピア自身として認めてゐるが、若く美しい友を Southampton とも Pembroke とも言及しない、只第一章において諸家の既説を紹介して困難な問題だ、と言つてゐるだけである。

以上の解説はシェイクスピアのソネット解釈における Baldwin と Knight のそれぞれの主張の比較対照を、ソネット中の重要な問題、特に第一〇七番及び詩人とその友との関係を中心に試みたのであるが、尙二三の著書についてひと言づつ附言しておきたいことがある。

シェイクスピアのソネットについては、戦後前記著書の外多くの研究が海外において発表されてゐるやうである。このソネット研究の複雑と困難は従来これに含まれてゐる劇的物語の人物を、直接シェイクスピアの自伝事項と関係づけやうとする興味本位に原因してゐたことは言ふまでもないことである。ワーズワスはまことに厄介な鍵をソネットの宝庫の前に落してくれたものである。戦後におけるソネット研究は、然し漸く十九世紀的興味から蟬蛻しつつあるやうに思はれる。ポールドウンの警句のやうに、乾草山にうつかり腰を据えやうとして針の尖端に坐るといふ軽率な愚を免かれんとする態度からと云ふよりも、詩そのものの厳たる姿に先づ着眼せざるを得ないからであらう。「たとへ詩人は真

撃でなくとも、詩は真摯だからである。」Hallet Smith の「*They*」及び「*These mountains of conjecture are almost all trash.*」They have no scientific or historical validity..... Nor do these theories contribute in the least to the understanding or appreciation of the poetry as poetry」(*Elizabethan Poetry*, p. 171, pub. 1952).

(これら山なす憶説は殆ど屑物同然だ。何等の科学的乃至歴史的妥当性を持たない。……これらの学説は詩を詩として理解し鑑賞するのに何等の貢献もしないのだ。)と慷慨してゐる。

「The Elizabethan Love Sonnets」(1956)の著者 J. W. Lever も伝記的考証の愚を述べ、シェイクスピアも多く立派な詩人同様自己の作品に必要な材料を入手すべく彼自身の生涯において充分な経験を持つたことは疑ひないことであるが、芸術家としての彼はソネットを創作するに当つて十分賢明にその経験を選択し改変したことも等しく確かなことであらうから、Mr. W. H. 其他の elusive な「such wild geese」を追ひかけることには参加しない。そして、「These questions have no bearing on an appreciation of the Sonnets as poetry」(p. 164). (これらの問題は詩としてのソネットの鑑賞に何の効果をもたらすものではない。)と、前者と同様な態度を示してゐる。

筆者は Knight が homosexuality の問題を取上げてゐることにについては既に紹介したが、そしてこの問題については、吉田健一氏が一段と露骨に取上げてゐるのであるが(「シェイクスピア詩集」序文・池田書店・昭和三十一年一月) Edward Hubler はその著「The Sense of Shakespeare's Sonnets」の「Appendix」の項でこの問題と真剣に取組んでゐるやうである。彼は、シェイクスピア時代において「love」とか「lover」の語が「friendship」を意味してゐたことを述べ、劇作品中の例——ブルータスの演説文句やコリオレーナスのメネウスのセリフ等——をあげてゐる。勿論ソネットには性的魅力を示唆する表現はあるけれども、詩人と青年との関係においてシェイクスピア自身同性愛の状態にあるといふごとき印象は生じない。シェイクスピアは十八才で八つも年長の婦人と結婚し、結婚後六ヶ月で父となり、その後一年九ヶ月で今度は双児の父となつた。彼は若くして実際に heterosexual ではあつたが、homosexual であつたといふ外的証拠は何もない、勿論この事も蓋然的なものであるが、それは「a man who was actively heterosexual in his youth did not later become deeply involved in a homosexual episode」(p. 155)といふバランスのとれた蓋然性である。このやうに主張してワイルド説に反対の態度をとつてゐる。尤も彼が一方においてシェイクスピアの「愛」の解釈にフロイド的解釈を是認(例へば黒婦人との関係等に)してゐるところから(五五—六頁参照)、Knight のごときは homosexuality の問題に Hubler が否定的であることにいささか不満を示してゐるやうである。(前記著書二九—三〇頁参照)

いづれにせよ、最近のソネット研究は主として詩そのものとしての解釈に集注されつつある傾向にあるといひ得るであらう。わ

が国において、例へば Baldwin が実行してゐるやうな証拠資料の探求など不可能に近いことであらうが、それにしても坪内、岡倉の諸学者によつてなされたソネット解釈に、何等かの改新がなされてもよい時期に直面してゐるのではあるまいか。尙、最後に、吉田健一氏が前記「シェイクスピア詩集」(筆者注—これはソネット四十余首の訳である)の序文において述べてゐる大胆な主張は、むしろある程度の突飛さを筆者は感ぜざるを得ない。

—— 本学教授・英文学 ——